

(7) トビイカの漁獲試験について

原 田 昌 幸 (静岡水試)

未利用資源開発調査の一環として、1979年10月29日～11月8日の間に、豆南、小笠原諸島西方海域において、調査船駿河丸(129.78トン)を用い、いか釣漁法によるトビイカの漁獲試験を実施した。ここでは調査結果の概要について報告する。

1) 海洋調査

水温の鉛直分布(図1・2)をみると、140°E線沿いの30°N以南では、表面水温25°～27°C台で50m層25°C台、100m層20°C台、150m層18°C台であり、50～70m付近に25°～22°C台の躍層がみられた外は、平坦な分布となっている。

24°N前後の140°～144°Eでは、表面から50mまで27°C台、100m21°C台、150m19°C台で、この海域でも単純な分布を示している。

142°～144°Eの24°N以北では、表面27°～25°C台、50m27°～24°C台、100m21°C台、150m18°C台であり、26°N海域までは平坦であった。

全般的にみても水温配置は50～70m層以外では経、緯度的にも大きな変化はみられていない。

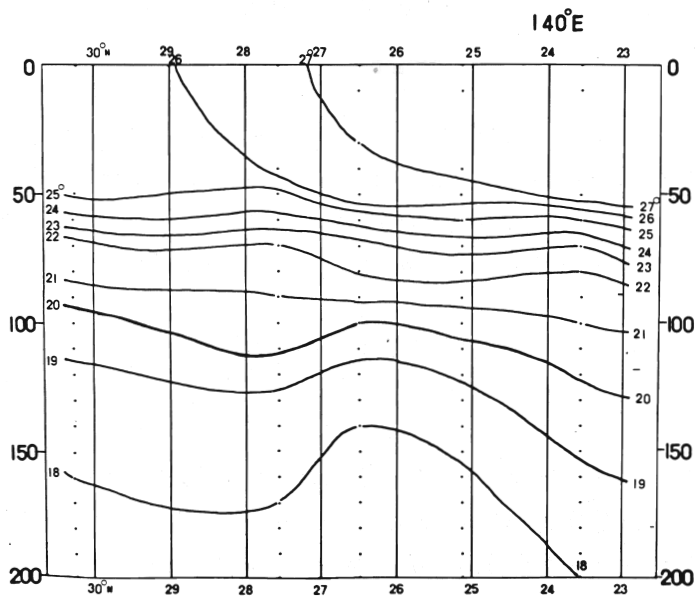


図1 140°E線上における水温鉛直分布(°C)

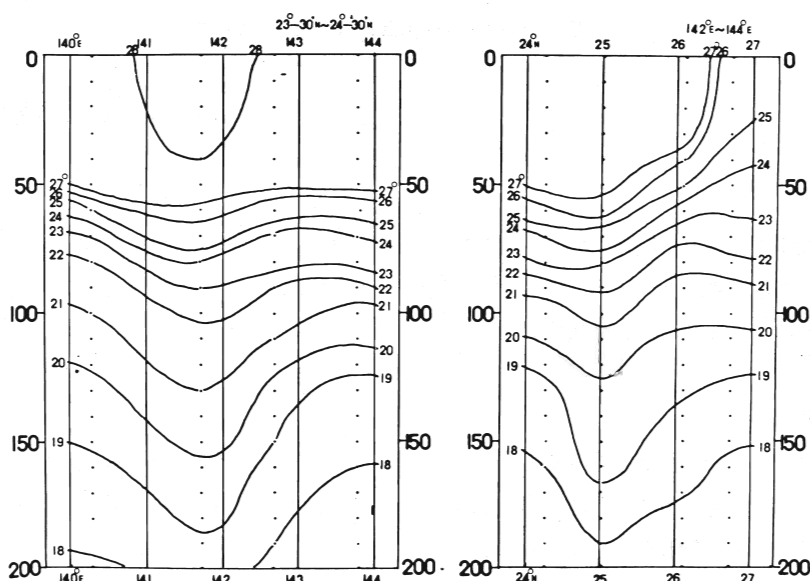


図2 23°30'~24°30'Nおよび142°~144°E付近における水温鉛直分布(°C)

2) イカ類稚仔の採集調査

口径1.3 mの稚魚網による15分間表層曳きを7点で実施した。11月3日25°-02.1'N, 143°-59.7'Eでイカ類の幼生を1尾採集したが、体部に損傷がみられ種類は不明である。

3) 魚探調査

魚探反応が多くみられた海域での漁獲試験が4回あった。このうち、23°-34.6'N, 142°-40.9'Eでは、水深40 m以浅に反応があり、自動釣機(100~130 m)と手動釣機(120 m)によりトビイカ9尾、スジイカ1尾釣獲した。一方、北側の30°-12.9'N, 139°-48.7'Eでは35 m層に反応がみられ、操業の結果、自動釣機(80~120 m)、手動釣機(40~50 m)、手釣り(20~40 m)でトビイカを17尾釣獲した。

しかし、これらの反応がイカ群であるかどうかは明らかでない。

4) 漁獲尾数

23回の漁獲試験でトビイカ38尾、スジイカ2尾の合計40尾を釣獲した(表1)。

釣機による内訳は、自動釣機でトビイカ23尾、スジイカ2尾、外に釣獲時の脱落2尾、切腕が13尾あった。手動釣機ではトビイカ7尾、脱落4尾、切腕4尾であり、手釣りではトビイカ8尾、切腕2尾であった。

表1 漁獲試験結果

S.T. No.	調査月日	位 置	表面水温 (°C)	時 間	漁 獲			備 考
					自動釣機	手動釣機	手 釣 り	
S.1 (2)	10.31~11.1 (9.11~9.12)	26°-30.4'~25°-12.8'N 139°-57.3'~140°-11.2'E	26.4~26.6	1720~2000 0430~0500	トビイカ1, スジ1	0	0	自 40 m~160 m 手 30~60
S.2 (4)	11.1~11.2 (9.12~9.13)	23-37.7~23-33.3 140-18.7~140-52.5	27.3~27.7	1700~1800 1915~2030 2130~2230 0000~0110	トビ5, 脱1	切1 トビ2, 脱1	-	自 100~140 手 30~50
S.3 (4)	11.2~11.3 (9.13~9.14)	23-47.1~23-34.6 142-40.9~142-59.9	27.3~27.5	1700~1815 2000~2100 2225~2340 0045~0145	トビ8, スジ1	切1 トビ5, 脱3	0	自 80~130 手 50~120
S.4 (5)	11.3~11.4 (9.14~9.15)	25-02.1~26-15.1 143-59.7~143-09.8	27.7~26.6	1700~1720 2000~2050 2200~2230 0300~0355 0445~0535	切1, 脱1	0	-	自 100~120 手 50
S.5 (5)	11.5~11.6 (9.16~9.17)	27-38.3~28-30.7 142-00.3~141-24.1	25.8~25.1	1900~2000 2100~2200 0000~0030 0200~0230 0400~0430	0	0	0	自 60~140 手 50~80
S.6 (3)	11.6 (9.17)	30-12.9~30-27.7 139-48.7~139-35.8	25.2~24.9	1730~1905 2030~2100 2200~2230	トビ9, 切12	切2	トビ8, 切2	自 80~120 手 40~50 釣 20~40
					スジ2 切13 トビ23, 脱2	切4 トビ7, 脱4	トビ8, 切2	合計 スジ 2 切 19 トビ38 脱 6

切 - 切腕, 脱 - 脱落

5) 生物調査

魚体：外套長 12.0~24.2 cm, 体重 65~684 g の範囲内のものであった。

性比および生殖巣：トビイカの性比は 33 尾中雌 24 尾, 雄 9 尾で, 雌が多かった。雌イカの生殖巣の重量は最大で 44 g (ML. 24.0 cm, BW. 576 g) もあり, アメ色の成熟卵がみられた。外套長とてん卵腺長との関係(図3)をみると, 低緯度(23°-40'N)で漁獲されたトビイカに成熟卵をもったものが多く出現していた。

胃内容物：消化されたものが多く, また, 摂餌も全般に少かったが, 頭足類の肉片と魚類(ハダカイワシ類)の鱗が観察された。

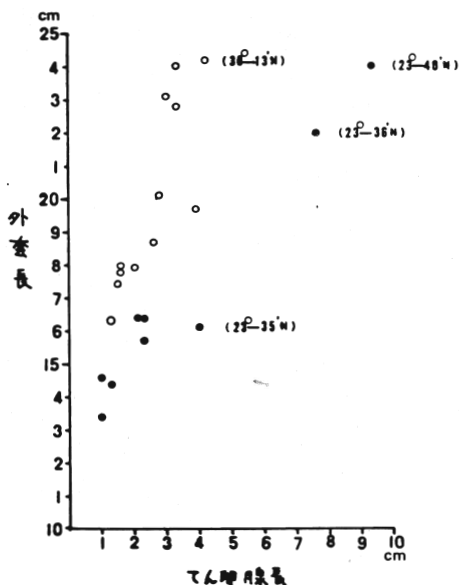
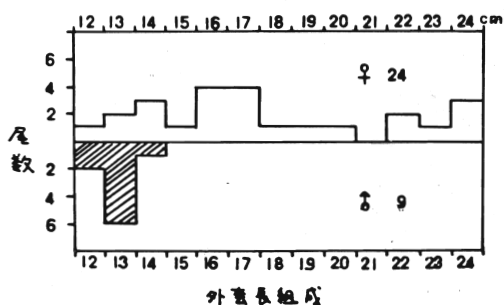


図3 トビイカの外套長とてん卵腺長との関係

6) 漁獲試験中における船上観察

- ① 時折り、3～8尾の小群で浮上してくるが、遊泳は速く、しばらくして沈降する。
- ② 舷側から離れた暗影部では静止状態のものが多くみられた。
- ③ 表層で索餌しているトビイカは灯付きが悪い。
- ④ 月令との関係では、調査時期が満月（11月4日）の前後に当たり条件が悪かった。
- ⑤ 濃密群となって船の近くには集魚しないものようである。

7) 今後の問題点

- ① 自動釣機による漁獲の可能性。
- ② 沖合海域での操業形態から採算の可否。

質 疑

市川（開発センター） 調査期間が短かったようですが、漁獲されたのはトビイカ38尾、スジイカ2尾だけとのことでしたが、アカイカについて脱落を含めて釣獲ありませんでしたか。

原田 今回の調査では全く漁獲されませんでした。

市川 船上からの海上目視によっても確認されませんでしたでしょうか。

原田 舷側の灯下に集ったものの中に、多分アカイカも混じていたかも知れませんが、漁獲されたものはトビイカでしたものですからトビイカとして表現したわけです。アカイカそのものについては分かりません。